





山東京傳編述

歌川豐國画圖

# 雙蝶記

一名霧蘿江戸書肆  
永壽堂梓

## 雙蝶記自序

双蝶記稿をひき。人よ叙稿とんとやりどか。家拙作をうながす。  
讀てくれるもあらず。とたれまぬ前よりまたびとて自縁と  
そんとす。うん城漢文のびれ。之乎者也の置刑。酢の蒟蒻のと面倒をうと書。景所が餅。吾の餅。あざ素人。うらうら  
柏餅。皮があつくて味あうどえむ。これと和文よちよとまよ。一の字  
二三論。まよへ過あ未來現在をまよ。三世因果業成さし謡の文を  
淨琉璃節。ほほるやうそ。かほりひじに変おふ。と僕が不文を識  
なん。蟹六甲よかせて穴うきまを世間。男やとやり。よつけ。舅男と  
字哉縁よ。此草紙が堤月とたづゆ。嬪よたうてつまふ。繪ハ

紗顏姿たり。作ハ則豪氣あり。板木彫ハ紅白粉なり。持  
 仕立ハ嬪入衣裳あり。板元ハ親里たり。讀で御まう。西方様ハ嬪君  
 な。貸本屋様ハお媒人な。さて顏容よたとある繪ハ歌川豊國  
 の筆下かねましぞ。板木彫の小刀モ紅白粉の化粧もよく。  
 携仕立リ嬪入を裳も不足なく。板元リ親里も欲城をうんで。匂  
 安賣乃嬪方れど。肝要乃意氣ふたとて作。思。田舎  
 言の其うちよ。都言。榜。手ひひまで。閉。ことおちり。讀で  
 ぐまう。嬪君乃氣よ。ぬがちな。一所。貸本屋様方のお謀人口  
 そ。かまく。娘が。頬よ。ひえ。心。は。に。ち。う。あ。生。日。あれ。と。其  
 か。り。生。れ。白。男。姑。こと。び。と。背。せ。嬪君。大事。して。律。義。一。人。所。茅

形氣の娘で。先見合。見て見ゆ。と。拙哉。おひす。厄哉。よと。と。ます。と。  
 ま。あ。え。で。と。ま。と。縁。お。む。れ。娘。も。よ。と。嬪。君。よ。あ。ま。つ。く。と。野。猪。も。伏。猪  
 と。づ。不。ま。く。馬。鹿。も。結。構。企。と。づ。開。え。が。ほ。是。則。力。と。た。の。を。ま。う。お。媒。人。の  
 借。本。屋。様。の。ひ。か。ふ。よ。う。所。な。う。然。則。板。元。リ。親。里。の。森。び。あ。く。祝。儀。の。小。謡  
 千。秋。万。歳。れ。千。箱。の。玉。城。あ。ま。わ。て。追。携。の。古。註。文。冊。く。の。板。元。城。た。ひ。ま。季  
 盛。一。か。く。や。す。所。城。あ。ま。れ。き。ふ。ち。う。て。以。て。是。板。序。と。物。前。小  
 旗。主。本。ア。ク。る。と。よ。ハ。忌。詞。大。福。張。せ。お。め。で。た。う。ひ。じ。れ。す。あ

と。と。と。

文化十年癸酉春二月

醒 醒齋 京傳 識



附てしふ

書名が雙蝶記と号ゆる。二蝶こそふ傀儡乃戯曲小引にてつゝ曰  
なす。あるむ吏のまごうたぬハ務の竹離のうちせ行雁の音をも聞て。  
かづりせざるが如くなじばまの名をあうよづき。常言ふ。そら言ふ似る  
實見ハリとも。實ふ似るそら言ひよをうせどりも人せ誣せしゆを。あふ  
此草紙はあすち地名年月日時人の姓名なり。都てそらごとを。あふ  
小實見せり。あざなゑく古人乃名ふ似かるもあひどそハ唯假用するのみ  
なれ。實記ふ。六ながら吏もあうて見む。今宜成べるどろん。素童  
なぐまむのなれ。俗耳ふと不雅言を好む。無下わざに言成りそちに。語勢  
どちらふとそれば。てふハと誤つて。あく耳をす。雅言とめちく。戯  
曲の文哉まぬうとん為なり。唯勸懲の意旨成ら。かへばざせ微意と  
すもの

## ○燈臺鬼

源平盛衰記卷之云。昔輕大臣の遣唐使に渡れて。形と他物  
字をす。燈臺鬼とぞとぞ。般吏を得て。子息衙。宰相其向後覺束  
き。大唐國へ渡て。たゞひじもく。目の前ふ有。す。明よりのあらなり  
れ。父へ子を見知は。角といふ。物いふ。藥をのませ。痘とまし  
たり。それをとも叶ひ。額と燈械を打まけ。宰相又向て只泣。外のゆき。  
宰相へやほまで。父の體を面を並てあべり。燈臺鬼涙を流しけ。

指端と食切て其血を以て宰相が前と角ぞ書連々

我元日本華京客

汝是丁家同姓人

爲子爲爺前世契

隔山隔海戀情辛

經年流泪蓬蒿宿

逐日馳思蘭菊親

形破他郷作燈鬼

爭歸舊里寄此身

と書わべくうながす。宰相ハ我父の輕大臣共知れり。是正史實錄小刀そばとりども盛衰記下學集等又載され。かくしに傳され更きべ。和漢三才圖會。此故事と記て大臣の歌と載、

燈の罪取しきまなれをふふやみのかなりかりう

大臣の子の名一決せば。時代も詳ならず。然ども河州古市郡は輕之墓あり。和州高市郡は法輕寺あり。丹波の桑田郡は輕神社あり。皆輕大臣の名を立至。但皇極帝の弟宮は輕皇子あり。是乃孝德天皇也。其外輕と称る名と候。以上和漢三才

圖會ノ説

此双蝶記卷之第四。右燈臺鬼の故事と據て作たり。故は左は其圖と出せ。大臣の子と少年の児姿は画する。かきそびとう









雙蝶記總目錄

卷之  
一

一 夏草やつへりのじどもの

二 むぎんやふせんじやの

三 犬ふとくもそろー

四 ひえむきにまきとれて

五 又月ゑやむゑひそふ

六 湯火とちをりよねふ

七 木枯の果とゆりう

八 我雪とれりへかうー

九 薫脣ふ花と見捨て

性胡身記牡遊身老亡夢  
命蝶受念丹偵賣女者路  
のののののののののの  
質在千竹睡曲愁懺計落人  
物舌金刀猫都歎悔畧

卷之  
二

卷之  
三

卷之  
四



卷之五

土紫れ織もありなり  
雪窓銭のうき世外と  
三きつゝきてる爰とまつる  
西蝶蝶はくとも床毛  
五宿かゝて急死かのじる  
六鶴わりうて頬てかうき  
老鶴とりて日をもむらふ

池辺主人合力  
茂林ののの  
化野石宿のの  
和睦の腰切  
鶴養の鍋蓋  
酒宴の妖怪

通計十七回

總目錄終

雙蝶記一名霧籬物語卷之一

江戸 山東庵京傳編

一夏草や兵どしに夢路の落人

徃時元弘三年夏草の露と消ゆ一夢の跡。憂世語を残して、  
相摸入道宗鑑二男相摸次郎時行へ一家亡一後へ天高一  
ひとも喝地廣一とひとも躋一一身とおくみ安きとくも  
かくも一信濃國み隠遁一深山幽谷のうちふ蟄一再天日  
と見る代もかと時節と待て居うち一頃日南北両朝に別  
亡親高時臣より道と辨ぞしてづひふ滅亡と勅勘の下ふゆ

とひどき。天誅の理みあらゆゑと存むるに依て。時行一塵（ちぢん）君と  
恨（うらやま）奉る處と存ひ。天鑒あらうふ下情と照へし。枉く  
勅免（てきめん）とさへしゆゑ。宜官軍の義戦と扶け。皇統の大化を  
あきひべーと委細（いさみ）ふ奏聞（そくもん）。よろれを。主上（しゆじょう）と閑（けん）召（めさ）。  
不義の父と誅（ちう）。忠功の子と召仕例（りきよじ）。すたふーもあり。四討其罪よ  
あり。賞其功ふ感（かん）おれ。善政の最（さい）よりとぞ。則恩免乃縪旨（アソニ）  
文と。日月打（うちうち）る錦の御旗の裏（うら）みあはせ。てぞよみづる。延文  
四年二月乃ち。時行信濃國守形の城みよせて。此彼ふ身を  
ひち居（ゐ）する平家の餘類を催促（さまそく）。さうなまふ去る年箱根の水飲  
峠の合戦ふ。父と打（うち）き子と打（うち）き仇（あ）をやくむ兵等。宿望（すくわが）まち  
ひきりぬと喜び。日とおひて馳集る兵凡七千余弱と云ふをれを。

鎌倉よ急と告る早馬。礮打波のひまうれぐどく。礮打手の志げふふ  
似て。これようて鎌倉の管領。諸將み對して軍略いふと議せ  
られすふ。これより遂寄りて其不意と攻銃氣と挫き荒肝と拔  
ふまつと。と軍議已ふ決一。月影今谷の判官照影と大將とて。  
鎌倉勢一万三千余騎。日やくも信濃國官形み馳着戦勝前  
みまとんて蹄とそらへ勇弱後ぶ隊りて唐突とひく。軍旗と翻り。  
金鼓とうちりて。闕を嘯とぞつうちる。城中みへ敵不意の逆あふ  
軍慮とく。術計いまさ十分みどとのをとつとども。累年憤積  
じて。義心金鉄のよれ兵どもされば。更ふ懸する氣色もなく。  
變ふ志と進退度と失ひど。おりた叫びて攻戦ひ。射ちがく射箭の  
夕立の軒端とそらぐ音よりも猶あげ。打合太刀の鎧音ハそらよ

應る山彦の鳴やむ隙もあらず。爰ふ故相模入道の家臣ふ大仏  
九郎貞直とよりのあり。前年敵とわざむして一旦鎌倉とのぞれ出  
相模次諒となりて始終もあれど。今へとてふ年五十歳小遣  
めれども力量武藝ましく減じど。さや當城ふありたが。此へとて唯  
一騎城と遠くとまれて敵陣ふ馬をそら。鎌倉勢の總大將月影子  
谷判官と。うそと打ふせんやとくろぎり。大膽不敵のゆゑまふ  
なす。敵兵ふまだきをやと。燒とべ著ぞ。白綾の鉢巻と。乱髪と  
額ふ頭と振り。白糸威の鎧のうふ雲鶴の地紋あれ。丹地の錦  
の陳羽織を著し。青鉢の大口と。見鏡の太力ふ豹の皮の尻  
鞚けよ。金作の小太力と。帶副大長刀と。右の小股み引そとめく。  
白瓦毛か。馬の太逞う。螺鉢の鞍と置。燃立をくまく厚縁乃

鞍とうけてぞまより。かくて鎌倉勢のむしがれ中へまびきり。東  
西をもひ。南北へ追まへ。黒煙を立て切てましに。寄手大勢  
ありとりども。唯一騎ふ切立とて。四方へ頭とじた。さも大將  
の下ともへぢづくとあはされた。むかくおのれも知具麻川のこゑ  
まで引退き。手綱かひうつ。早咲の藤波のかゝる松蔭ふ汗馬  
とよせて息とやら。乱毛くる。鬢と押あげて。城の方とくまく。  
むしの山間ふ白旗赤旗いろくの旗。春風ふり。ぐうて。雲うら落ち  
花の波霞ふまじくもあぐく。見鐘太鼓鰐波。いとゑひもく吹へ。う。  
雜兵二人貞直が妻女更級といふてまし。此とくらまで落來そ  
ひ々々。敵兵一の木戸と打やぐて。城中へ攻入ゆ。御懷胎

内室とこれまで侍供ひこへひとりを。更級もいそく。妾懷胎の身よ  
あらば。女かぐも敵にむろく一方とふせぐべきに。どうあーと  
産月されを心へ矢猛よもやりもべきど。男のをとすき自由ならうぞ。  
彼等ふ扶られて。とあく外足とひざせしと。からとくひといふ。大仏  
九郎これとまて打撃すた。さてとく味方の安危うちりを。我を  
それより城中へひだく。今一軍一て敵兵とおひくまとひます。  
馬とまんとくとみふ。更級へ此と急小产のけつまれた。彼方も  
氣づく。此方もさとふ見えまくぐく。馬とくじて轟くぐうとけめ。  
此處へまぐて墓原ゆく。辻堂一つあるのみあれを。雜兵どもに下知り。  
更級と辻堂ふととゆう。堂中の額をあくぎ見るふ。子安地蔵尊  
とくにつけわれた。これ產所ふ幸ひの表事とまくび。地蔵菩薩

十種の福と得せしりゆふうちふ。一者女人奉産と。地藏經小もあまば。  
佛前と穢とままであくまゆまドとて。堂前ふ櫛の板と敷きく。  
案山子のむ裏とく來りて其上ふちまくみて。更級ととしる。  
鷄口の鉢の緒と産綱となくくとりつゝ。雜兵と腰抱く。わのれ  
かくらふありて介抱を取ふ。一人の雜兵うくまどひもくひく。  
こゑのひそむしそ。胞衣桶へいづくふ。鰐筋へいふ。産湯へいづ  
ゆく焼もくさきどりひく。馬鹽とがくてあら走りこり走るを見く。  
貞直へ氣をつら。見ゆる奴ふ。人家ふ遠き世辺とくひから戦場零。  
いをうさする。自由のうれぐまや。とく川水と汲来と。と呵てあひゆ。  
産婦ふそひひひまく力とつけらる。陳鐘太鼓の音。矢叫軍呼の声  
知具麻川の漲る音ふひぐれあひく。とよまゆとく實くられべ。更級へ

志が心かく。とくにあやまて産をうなり。からどりーも郎鷹魚瀬劍太  
とくふ者汗もあととみ走來まくひきまぐさ。脚註進つまうると呻う  
ゑだ。貞直へこれときていそぐべく。極みにふくろと氣とせけだ。  
剣太へ息もつきあへど。されば敵兵をてふ城中み攻りりりへども。  
味方の兵全と惜まど。二の木戸ゆくかせだ戦ひ。といまざいもど  
ざるうちふごくとの産婦息もするけふいとあやまて体えられ。貞直へ  
かうこと閑さて。産婦の背中と極さとり。折もすり時もとたとて此  
産氣催生葉ざふくりぬ。戦場の火急の節。さをうり心弱てへ  
産得ま。あん身へ常の女ふ似ぞ。日来雄くじた心とりて。男ま  
立の女うみ四十歳まだてのうる産とくりひうら。かどてよびうる  
ひよきだ。自ら氣とおげまきて。とく産ともひく介抱へくるまふ

むふ。シテ其わと。いふくと問くと。劍太へ汗とのどひとま  
ひふう。今まうやじとくや。雌雄いま決せどりへども。味方の必起と  
きりて戦ひ。引鐘と閑て。怒り。そむ太鼓とまうまびく。勢曾て  
あくまきど。敵へ遠路と押來まて。勢ねじくられひを。旗色  
あく。金鼓の声も濁りて。閑へはと勢ひこもて告るみぞ。貞直へ  
やく。色とありて。まうべを。劍太いもく。拙者へ今度走り  
て様子と見とけ。再又脚註進つまうん。とつひもとを極びどくみ  
走去ぬ時ふ又陳鐘太鼓と乱調ふ打うして。喧とわざと観波  
天地もぐれどきうれだ。産婦へこれふ氣のびりーと。あやと叫ぶ  
勢ひふ。子ぐりして産もく。ちくふ産声とおげあくも男子も  
うれだ。貞直へ味方の勝利の註進とまうふ。此安産ゆまと。轉

まづひふと。雜兵み食ト陳笠と鹽み。川水とくまもて生子の身とまも。襁褓みゆびき物づふるれど。陳羽織とりまてこれよつも幸ひくれへ雲鶴錦。此兒のむかで千歳の鶴の羽とのー。且せんうそうじ。青雲の志とおとせりと。心の裏みいじめ。抱きあげて雜兵等みゆく。かゝる火急の時節され。かくせよと食ふんを。二人の雜兵くらえぬといへば。辻堂の序廊と引きて。更級とのせ。あこしたてをやげて。山越みちり行ぬ。松貞直もりへたる。此所ふありより敵みかとまし。足場うへれを便よし。且廣場ふ出て城中乃様子。味方の安危と開べーと。辻堂の鉢の緒とひれりぞりて生子と我身みひーとくまつけ。馬引よせてひらうとま。長刀と莖短く拳みて。東の方へやんともするふ。敵らく寄よるとおぎえて。むかに

さけぶ声とよき。生きゆ。生子のれみおびえとあひり。海。  
すがよく大の子と背とよれり上り。狗のアラシひだくして。西の方へんとすふ。うきみ敵充满して。鰐波と嘯とあぐれみ。前後の道とまざれていくふもぐれと行きよ。かずも泣子とくらむ。ちくらむよふくらむ。もれん東西うち敵兵颶と寄来とべ。長刀と打ちて三方へ追捲。八面ふ斬てまく。頬額立割車斬或へ母衣付腰車架。沙織みうけてへ左右みを。双膝うだての内けふそそ抱一。生子とサグふ。十分ふくらみ。とくとも。力量ぶけはある。三歳の幼主阿斗と抱て。長坂坡ふ戦。趙雲ふもとくおこね其骨柄神変不思議のむくふ。敵一ひる木葉武者四方ふくらく散失。貞直へうれも生子とゆりあげ。



息と休む居とれぬ。以前の郎等劍太裸身ふ雜鎧を着城の水吐の穴と見て出一と見え。身上ぬきて軍とて走り來。陳笠と地上ふかりと投捨く手とて又歩註進りと告ふぞ。貞直へこもらうぞ。松子へりふとづぐれを。劍太一息つゝくひき。味方の兵必死の戦ふ。敵の人馬へ大みづれ。己み落足りきる處ふおりひきげど月影ケ谷判官の家臣山咲庄司雪森とく者荒手の兵數千騎とまぐて押來り。城の後ふたりまく。矢と箭と兩の刀。精兵あまと面もかくと掛やすづは猛き。涉大将も軍略をきのく。後ともりんとく。前の敵是とかくさんとく。前ふひくとく。荒手の兵後ふ打ひ。變化ト。自在の術尽りて。味方の兵と打死。涉大将も腹りきりと

あされうて告れ。貞直へこれと聞て大ふかじり。喜びの色忽變。トて愁眉と顰鼻。何涉主君へもや。涉自殺ゆり。智勇万人よき。れあ。涉大将。十ふ八九も勝べき軍ふ。甲斐き。打負とす。まづ南朝の王威。おもくをき。聖運微ふき。せよ。ダ。ゆゑ。あからぢやや残念や。と或へ怒り。或へ悲し。牙と歎拳を握て落涙し。主君の命とひがき。我一騎遠く城とむなし。總大將と打んとて打も得。主君涉自殺の場。わざと不忠の至り。已ふ大將。させかふ。我一人生とまりて何せん。此。まづかくへ立とて打死して。死ぬ路の傍供ひとく。さりとて。今生もとれ。此孩兒と此経。こふ捨てて。敵の馬の蹄ふしき。殺せんも不便あれ。汝の此子と抱き。山越ふ落行。更級。わく。伏れて。涉一

在よ。此子成長の後父の遺物と見るべからる。此一品とすゆべーと。鑑のひに合せり香色としろひど。此裏あがへ身摺もと名香あり。是乃揚貴妃が椅子の木のうとうゆ。常々貴妃が身をうとう。おのづく摺する木うちゆゑ。身摺と名づけた。此子はくがなく成長をとど語をきをよとつて折しも。交ふかれよと飯雁雲井（モカシ）かくびきれを。矢立の筆と染て

まことと頼の雁の別路へ。時間ひまゝ矣名残きりう

とよ一首の歌とかの香色の裏ふりきりけ。親子へ一世の縁ありといへど。父子再會へ時間ひまゝ百年の後冥途のミタニカド。今生き生て今も影しよう。よく薄き親子の縁あり。と猛き心も子ふふきりて。目とり涙をくと落ひまと。矢並づくらふ鉄のくふ霞

まことる如くや。さてかの香色と孩子みうして。陳羽織み包むる  
修劍大み渡せん。劍太へんとうけ取く。悲歎の涙せんわくを。主人の  
りん狀（シテ）もろが。とでふ苦形落城せんと見え。黒烟（クモリ）うらのが。烈々くる兵大天と焦し。あまとの敵共々くゆうと凱哥（カイゴ）とあぐる  
声百連の雷の一度かづくらひて渡てられ。貞直（ツバサ）とこれどりそ。  
無念の落涙（ロクリ）かとぞりゆか。劍太ふむひ。汝此處小猶豫（シラフ）て。り  
敵兵み山道（ヤマミ）とぞれ。其子と扶て行とあつて會（アツメ）。名残（ナガシ）  
尽（シテ）ぞとく行といふとんべ。劍太へ是非（セヒ）く候（ハシメ）。山路（ヤマミ）として  
かり行ぬ貞直の孩子とおもへ。さて今ハ心安（ハシメ）。いとく花（スル）く  
軍（アーミー）と。敵兵（アーミー）と目とぞぬよ。うやう打死せんやとふゆかぞ。日來の  
勇氣百倍（ヨウキヒヅキ）と。敵ある方へ馳ゆんとあく。折しも。もひ乃方乃

森のうちより。弦音<sup>弓音</sup>高く漂とひだりく。一筋の箭飛來り。馬<sup>木</sup>みちろしと立ぬ。貞直<sup>これ</sup>と屹<sup>き</sup>と月す。これ矢文うりけを。馬<sup>木</sup>みちろしと矢とねどり。結ひつけらる文<sup>文</sup>とくさ。讀<sup>よ</sup>りて打<sup>うち</sup>かざ。卷<sup>まき</sup>がまんとまくらうるふ。忽一陳の颶<sup>あわせ</sup>と吹來り。地をもくろい砂と組<sup>くみ</sup>。かの文と虚空<sup>うつ</sup>をふ吹き<sup>ふき</sup>れを。其あと縱<sup>なが</sup>め行<sup>ゆ</sup>く。とりへも。鎌倉勢又観波と喧<sup>ごん</sup>と喧<sup>ごん</sup>と四方より馳來り。貞直と取<sup>とり</sup>て我討<sup>そと</sup>とんと競<sup>きら</sup>。貞直<sup>これ</sup>と見て呵<sup>か</sup>と打<sup>うち</sup>ひ。余<sup>のち</sup>あ<sup>の</sup>の葉武者とも。我と打<sup>た</sup>んと寄來れ。夏の虫焰と惹て。うづく<sup>く</sup>身と焼<sup>や</sup>は異<sup>こと</sup>をぞ。そく汝<sup>な</sup>う<sup>な</sup>體<sup>から</sup>小<sup>こ</sup>りか宿<sup>す</sup>せる魂<sup>たま</sup>ども。我此大刀の下み追出<sup>おと</sup>して。冥途<sup>めい</sup>へとまよふ人をぞ。手なみと月<sup>つき</sup>やまとよび<sup>よ</sup>。大長刀とひらりしてむし<sup>むし</sup>る敵の真中へ

とて入<sup>い</sup>蜘蛛手<sup>の</sup>結<sup>むす</sup>幕<sup>まく</sup>十文字綻<sup>ひびき</sup>横<sup>よこ</sup>无盡<sup>むじん</sup>にかけやす。火花と散<sup>さん</sup>して戦<sup>たたか</sup>ひ。駒<sup>こ</sup>の足<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>かくと<sup>と</sup>どう。鐘<sup>かね</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>かくと<sup>と</sup>ありひだ。火雷神<sup>かづらのかみ</sup>のあれと<sup>と</sup>は<sup>は</sup>かくやと<sup>と</sup>ふ勢<sup>せい</sup>少<sup>すくな</sup>。組<sup>ぐみ</sup>んとちく<sup>く</sup>無<sup>む</sup>の鎧<sup>よろい</sup>乃<sup>の</sup>揚<sup>あ</sup>卷<sup>まき</sup>くつんで。弓杖<sup>ゆきじょう</sup>五杖<sup>ごじょう</sup>をう投<sup>なげ</sup>す。其人疎<sup>すま</sup>ふあく<sup>く</sup>る無<sup>む</sup>心<sup>こころ</sup>。四五人<sup>よ</sup>つれて前<sup>まへ</sup>る川<sup>かわ</sup>中<sup>なか</sup>へまろまろと<sup>と</sup>ゆで<sup>ゆで</sup>ちり入<sup>る</sup>。敵<sup>てき</sup>へうへ横合<sup>よこあわせ</sup>より。矢<sup>や</sup>と<sup>と</sup>ぬと<sup>と</sup>つうて散<sup>さん</sup>く。小<sup>こ</sup>射<sup>し</sup>う<sup>う</sup>る。貞直<sup>これ</sup>とあひゆく。ちるかひく。射<sup>の</sup>く<sup>く</sup>矢<sup>や</sup>と<sup>と</sup>蒙<sup>まつ</sup>筋<sup>すじ</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>落<sup>おち</sup>。逃<sup>のが</sup>敵<sup>てき</sup>とあひゆく。ちるかひく。射<sup>の</sup>く<sup>く</sup>矢<sup>や</sup>と<sup>と</sup>弛<sup>ほど</sup>ゆく。どう一<sup>い</sup>も川<sup>かわ</sup>霧<sup>きり</sup>立<sup>たつ</sup>て。ちるかく其姿<sup>そのしき</sup>をうご。ゆうて山<sup>さん</sup>風<sup>ふう</sup>霧<sup>きり</sup>と吹<sup>ふき</sup>く。貞直<sup>これ</sup>とあひゆく。馬<sup>馬</sup>も奈<sup>な</sup>うる<sup>うる</sup>や。歩立<sup>ある</sup>ひて。長<sup>なが</sup>刀と杖<sup>じょう</sup>みつま。ちく<sup>く</sup>足<sup>あし</sup>も痛<sup>いた</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>よう。肩<sup>かた</sup>もあま<sup>ま</sup>く矢<sup>や</sup>と折<sup>おり</sup>て。枯<sup>か</sup>野<sup>の</sup>み残<sup>のこ</sup>る冬<sup>ふゆ</sup>草<sup>くさ</sup>の風<sup>かぜ</sup>ふ卧<sup>うぶく</sup>す

異あつた。全身血ふそまうて。白糸威もさりまつ。緋威と變だ。  
鎧の袖の三の板と切かとまし。草摺の横縫皆つまき切とく。威一毛  
むろぞ續くる。今へこれまでとやありのえ。跡とつりまくらく組  
つんとせ。敵二人と。左右の小脇ふくもまんで。堤のこゝ人ふ行のびり。  
汝等死ぬの供せととまくアリ。知臭麻川の深瀬の渦巻うちり  
ととく入バ。白浪をとれ散て。ソレシベ底の水脣とうる果て。  
唯漲る水の音のそ残とる。嗚呼此日へいゝる。日ぞや。まよから是  
延文四年三月十五日の事ありとぞ。

(二)ひざんやか兒の下の亡者の計略

さるやど。奥淵劍太へ生子と抱き山乃とまて落ゆ。鎌倉  
勢もやくらふも立まうそろとまて落人とうりうんと望ぐれ

様子されとせんとく。旧の處ふ立り。東の道より落やん  
さるふ多くふも。敵兵のおり声とまく聞えて。近ぐと寄く  
様子れど。心へ矢猛イとされど。双拳四手ふ敵一ヶ。殊ふ生子を  
抱きしれど。此處とて敵ふとくとまれうぶ。とくと打るべ。一旦  
身とく。敵の退くと待てのれ行ひやとく。かの辻堂のうち  
へて身まゝり。軒端くすり壁くすみて古堂れど。雨風も  
ふせぬとて体とて。本尊へ大き木仏の地藏うり。朽木ふ昔ある  
らふとて。脇のあらみ寓木と生れ。箭箒竹膝をうぐらく  
生出。石の仏具へありうべ。香華と供養をねとせよとぞ。  
塵うらうくつり。木の葉まづうて。孤兎の足わとく。翠や  
翠子巢といふ。蜘蛛細とむとぞ。いとせすん堂中うらとぞ。身を

隱とてを逃さず。いふとぐきとちひり。地藏尊の背後のやうに  
暗き處みゆうりと。棺桶一つありて。かくと。阜圍とちり。これ幸ひ  
人の氣のつるよれか。死ぬよりとあり。繩ととん蓋とらむ。死人を  
引ひて仏坐の下の空す。所みがくとあた。もれへ生子と抱き  
桶のうちみよとらむて。阜圍とくろぐま。息とこしして居る  
う。わらう。百姓とかがき者四五人道心坊と前立或も  
寧堵婆とねむ。わらひ櫛の枝と提念珠とつまざるもむりて。此堂中  
み入かの棺桶としげりと。繩のつけあゆび。やぐと阜圍を  
とおのけと。劍太へ敵ふと。つゞかれと。とおもひ。運命のつまざる  
所とおひり。桶のうちよりと。どりと。片手みと生子と抱き。片手み  
太刀と抜き。切んと身ぬへ。道心へとれと。且さんふ鬼を

しき。亡者まはがともやく幽靈ゆうれいふたりて出でりとちくさぐ。あけときげびて  
のけさまふ倒たおり。百姓とひども皆持もつ持もつ基もとどす。み尻餅しほもちつまらう  
きよさん人ひとごうちへされ体からだ。劍太つるぎとくとくとくふ敵兵てきへい  
ああで野邊のべもううまた殺者ねしやく等とうとおがおがれを。太刀たちと鞄くわふとある  
いづ。汝等なもどうくへうごき。我われへ子細こまごまあり。此桶このぼのうち小こき  
居ゐりとよ百姓ひやくとくと開ひらてやうく人ひとごうちつき。俄やがてふ強く  
なりてまうり手てあつてゆく。汝何等なの者ものかれた。他の棺桶くわんとうに  
りもくられ居ゐ。我われくふりく肝かんとつまきをも。亡者まはども  
いふやえがそく腹はら立たつけふり。劍太つるぎ。亡者まはりふ隱かきがま。  
まづ汝等ないづの者ものぞともよ。百姓とひども劍太つるぎがあらぬよく  
見みれ。裸身むきみ鎧よと着き。太刀たちと帶おび。又少すこ一いっこひげひげと言い

わくよそり。我くそこの山一つあきふ住者ともす。今日  
此辺み軍あそんとへひりど。此桶の亡者へ村を各ふ住。独身  
の小百姓みて。今朝往生つせゆ。日暮ゑれ此所もく烟と  
きとぢやとがりみ此堂中み入あまつる。此辺そぐて戦場とかり  
て往来あらざれを。かゝこの山道とらまびる軍卒ふらうくも  
とまうーと此ふ来りひとつ。剣太又ひやう。かの山のあきふ住  
者あうべ。故相摸入道殿の情恩とうけられ百姓どもうべ。  
かくよ我へ故入道殿の家臣大仏九郎貞直<sup>ミカサ</sup>九郎筆なり。此  
生子<sup>おぶ</sup>の主人九郎殿の子す。九郎殿<sup>くらとう</sup>今日此所もく打死しゆ。ふ  
我へ主人の遺言みます。此子と抱きて落行んとおりども四方小  
敵充满<sup>さちまん</sup>一て。づれ行べき道あるせんとぐ。此桶のうらり隠

居うち。汝等故入道殿の情恩と忘とぞ。かづくとくとくと  
きやけを。百姓とも口とそく。そそへ左柄みひ。代い入道殿の情恩と  
うけられ我くされど。いそゞ作と背<sup>せき</sup>とつとつと。剣太あがやぐ  
がく。佛坐の下もり亡者と引出。鎧とぬでて亡者かゑせ。かづくせすと  
まく。其べ百姓ともへ打あづき。堂前ふもそあり。陳笠と長刀  
とひらひ取く。まづ笠と亡者ふもそ。卒堵婆と横ふ亡者の両  
手とくとつけて。長刀と杖ふつ。一人の百姓ケツハシタ。へふ鉗平  
これ見る。武者づみあうどやとくを。いもぬ鍬助<sup>くわすけ</sup>助<sup>すけ</sup>づふ通り。  
馬子ふも。衣裳亡者ふも鎧<sup>よろ</sup>。ひしや。とこそ薪みてふま<sup>ま</sup>死體<sup>しき</sup>土  
わせりの身でかりふも一騎の武者とす。百姓の身でゑとす  
鎧と麻幹<sup>まぐさ</sup>の杖ふとくとくて。長刀と杖ふつ。死花咲<sup>さく</sup>せても役

立と仕合せりのとづやたり。松の木ふとかけくかけを。剣太も裸身ふ太刀と見るをも。生子と抱て桶みそつやり身をかくを。百姓ともハ立寄く蓋とおりい縄しげみて卓圍とつけ。棒をさりてかけられを。道心坊へまじふ立。鎗とくろ一経と讀ウ山道とのぞみて行多ふ。むすぶ群る鎌倉勢。され落人よといへり。ちく来るとくとく刀とく。あらうまれ落人やあらうぞ。またやとくとくとく通りす野辺から百姓ともす。戦場少く棺桶へ足ともまい。さり行とりひく顔と背け。道とくとくとく通一れを。桶の内の劍太の志と角す。あらうともゆひ。あらうふ生子の泣きも神仙の擁護す。あらうともううびぬ百姓とも足とくやもて過去ぬ。嗚呼生子あれを亡者わ。生死流轉も一時ふ修羅の街で騒ぐれ。さく此とく

とで不黃昏のころをてやべの暗くきうるが。こきふふ鎌倉勢馳集て。松の木ふとけりかう一亡者ともうふ見えつけり。大佛丸郎がもくとく手ごり。臆病神のつまみれ者ともれど。りくえをくまと。且評議一とくのうふ。わし又は松と小どそアトも。長刀を杖よつま。大手とくろげく立よる。大仏丸郎が郎等にまぶか。彼奴もかくかく者。立合の勝負かくきに骨ばそんう。遠矢ふうけて射殺せとくのく。矢がとめとつくりて射する矢雨轟の降りまふ。うれどいふて身をうれどせざれど。哀や彼奴へ立まくまき。組んとりびく。兵の肩へぐみすとく。我先もあくまく。組んとりびく。兵の肩へぐみすとく。我先もあくまくと身をうれど。唯一打と斬つらむ。血まくりとざれど

死體。もうく。亡者。生るが如く。うかふうがよ。兵の背中。ふどうま  
手。ひがく。しゃこもあく。と呼り。そらよる手。その冷たさ  
み。心のつね。臆病。武者。もうてもつて。ひまぬ。亡者。うち物  
業。やくからよまし。と。大手。ひろげて。組つけ。ごくとも。加勢  
亡者。と。相手。えんづやれ。つまく。声。操合。ひし。ふをうす。亡者の陳笠  
地。ふ落。う。二人の武者。へづら。と。くく。刃を。變。と。乱。と。色。う。り。  
額。か三角。の紙。と。わ。經。惟。子。の。ふ。鎧。と。着。く。居。う。れ。と。兵。籠。  
あたと。と。是。へ。正。一。く。亡者。き。千。劍。破。の。城。れ。藁。人形。捕。り。と  
の。謀。計。み。の。く。れ。く。わ。く。矢。種。と。つ。ゆ。く。く。ま。よ。く。く。く。く。く。く。く。  
ハ。く。一。兵。と。も。へ。哄。と。笑。く。一。同。う。陳。所。と。ま。ー。て。飯。り。ゆ。ぐ。る。  
○。か。く。て。東。西。の。山。く。よ。吹。立。る。揚。貝。の。音。幽。谷。響。ふ。り。だ。て。と。ど。る。

いく。おち。こち。ふ。散。在。ー。る。兵。ど。も。お。く。ふ。集。り。れ。る。總。大。月。脛  
影。今。谷。判。官。甲。胄。養。ヒ。ー。く。馬。上。そ。歩。卒。ふ。わ。ま。この明。松。と。と  
より。知。具。麻。川。の。ト。と。う。ま。で。出。來。ア。ミ。諸。軍。の。戦。功。と。賞。れ。る。  
家。臣。山。咲。庄。司。雪。森。駿。と。と。う。て。ひ。ぎ。ま。う。き。勝。軍。の。う。う。う。び。く。相  
の。づ。か。る。ど。う。ー。も。庄。司。が。郎。等。南。方。十。次。兵。清。とい。ふ。都。南。朝。の。帝  
相。模。次。郎。か。よ。ま。り。と。れ。日。月。の。拂。旗。と。う。ぐ。取。く。弛。来。ア。や。く。  
さ。き。け。く。主。入。庄。司。ふ。渡。ー。れ。る。庄。司。へ。こ。れ。と。判。官。ふ。と。そ。ま。る。判。官  
群。う。と。賞。養。の。わ。ま。朝。鳥。と。き。び。け。る。刀。と。手。づ。く。ま。う。う。き。群。  
これ。が。お。き。あ。て。あ。の。め。な。を。あ。ひ。陪。臣。され。ど。も。十。字。兵。衛。が。大。功。抜  
十。字。兵。衛。へ。固。目。身。み。あ。ま。り。あ。ま。く。が。押。戴。て。帶。と。う。う。く。さ。く。判。官。を  
陳。所。と。ま。く。取。り。や。と。う。う。の。腕。月。モ。明。松。の。光。と。ふ。り。と。と。と。

馬のいきく声えり。ゆゆくぞおげえる。山咲庄司もゆゑば馬工  
打字三十字無清等と率そく後驅とまくらる。忽颶と吹きを  
夜風かしまく。一ひしの文盧空よりひくらて落し。庄司が兜乃  
鉤形ゆせりまくる。是則かの矢があり。山もうふ吹ひどされて。  
此處か落すまくさん。庄司へこれどう。十字無清が明松とりづけ。  
夜腐みあめりて讀ぐれど。うちじて讀ぐれど。何心ふ思案  
打うみ。行列打せくとくわせぬ。

(三) 蝶々ふとせばおそろー老女の懺悔

さてと時光のそぞれし。水の流きふ異かくど。金鳥玉兔乃足  
いちもく走り。一夢もうの間よ十歳あまりの星霜と経てもそ  
応安三年あそひうる。此とれ相列鎌倉の小動とふくらむ所ふ

駕籠の塵兵湯とく貪り者。里ともあれて一口家と作て住み。  
こゝへ古き歌ふも。こゆ歌きの。殘の松風音もれを。夕浪千鳥うち  
さくさく。とくそく所そて。浦りに宿家えを。風いとあくのす  
くく。浪の音松の風常ふくそくする所そ。かきく駕籠の塵兵湯  
とくふへいきゆゑなぞうれ。常ふ此鎌倉道よ駕籠とくひいで。  
往来の旅人とのせ。きぐの賃錢ととりて。朝夕の煙をとれる  
ゆゑふ。異名とあくびる。れ今年齡三十七歳ふ至。妻乃  
於破矢とくへ年へ夫ふ二つまきて四十歳ふち。前の夫を  
樂人ゆくゆく。おのづく事とくひくおげて。今も諸社  
やとれて。神樂とまふこと。活業のことをけし。子へ男女二人  
とやくある。姓へ名と小蝶とくひく十四才。弟へ蝶吉とくひく



十二才あり。兄弟とも貞容うらしく。花よりも清く雪よりも妙也。  
少て玲瓏す。一双の珠玉とすべる如く。楊貴妃のよまか立業平  
の童姿也。かくありてめとおりをもうされど。里人等へこれを  
見ゆ。鶩の巣うし嘗を育るふひときどりのくもやく。親乃  
身へ殊更みいつくも深く。かの竹取の翁が赫奕姫とやーう  
心うそ。もゑうのりくぞうのう。弟の蝶吉とぞ。物学びのう霧が  
沢の月輪寺とうふみつゝーおれ。今へ姉の小蝶との家ふすゑ  
おれぬ。さく一日塵兵衛。つひのとゞく駕籠とひげて出行稻村が  
崎の松陰ふおうむじく。人のやとひと待居す。そも此稻村が崎へ  
東北へ経路盤曲して極樂寺の切通ふつた。西南へ海水浸漫  
とく。江之嶋と眺望を月影谷の木枯の梢とせざりて黄葉と匪。

七里濱の高波へ巖とあらひく白玉と散せり。遠山遙峯。平砂  
曲岸の好景。がんとづもあらど。さて塵兵湯へ駕籠のうらう  
尻うけく往来の旅人よしむ。駕籠にりきとや駕籠くとゞく居  
す。諸社の宮奴ふやうとく。うちひとく。幣又しの者鳥帽  
子ふ白張とひだりく極樂寺の切通ーの方より来つ。おあ  
松陰すあぐミ居く。天道がんじつ塵兵湯小向ひ。いつもく精々  
出るよしのと。塵兵湯つゝ。昨日へ大雨も。旅人もまれられば。少一の  
錢も取ど素手うてこじゆ。今日へ昨日ふうにて。また天氣れべ。二日振  
の歩ととをとて。声からむどうふ呼ぶれど。かう向てくる奴どんきなまく。幣又  
打笑ひ。昨日星の脚堂の軒下で。さうけと将棋の勝負せまう  
司。昨日の約組おげなく居る。錢ぐれど此方も退屈司慰

さて見やれと。幣又へとぞくとす。懷中將棋と取出し。盤の紙と  
芝のうみかへりけを。塵無清もむし合たひふきづ。約の數。磁  
の小石と貝殻へ歩の不足とぞ見えふる。あぐべとく。塵兵衛  
いもく。ゆゑく盤上ととくとえどぞ。工夫一と相手とまどへりと強  
りの先手ハ和主。イヤさしれ。まげ。恐車。その歩とつよと。こまく  
將棋のうみかへく。まのふ手数とぞく。幣又へ頬びゑつゝ  
盤上ととくと打かぢり。これ塵無清此通双方の棋子とく。  
とく。奥鱗鶴翼。常蛇の形是乃戦場ふ敵味方の對陳。  
不戻あへど。いやれ我等がにまくとくれど。今已ふ南朝北朝  
二裂ふヨリレとおへりまく。此盤上ふ王の駒の一枚わざふ同  
じく。塵兵清打うかづ。いきぬ和主。ダツフ通ニ枚の王ハ南朝北朝

角みひく。名大將。足羽の深田み約とおへ。飛車とく  
桶。おも。湊川みむぎ約と打ち。武藏野の手見禁ふ勝りく。  
頭のもの。桂馬の高上り。家の崩れ歩の餌食と成果られ  
され。又や和主の約のやうふ。南朝の王は約。吉野乃奥盤上乃  
片隅みおり。一手う。二手で機ふか。哀か事としのひれを。  
幣又へ胡盧。イヤまひすか北朝方の足利家。今へ盛ふやこれど。  
此方の手めも約がある。とのいづく。名将。が。やくわんすくれど。  
金将や銀将。が。王城。といふ。堅固ふりうても。歩も成金の時を  
得て。官軍の桂馬の約と。打こんだ。かんとく。イヤ。香車の鎧の  
野猪武者。桂馬の高飛。かく。な。夏。ひとくわれど。打ち。む約。歩で  
あらふて。せうそ。約。つかむさんこれへと退約。すが。ひいどもあらふ。

不も手數多くあれど。寂前よりはるか薄とすりて昼夜して  
居され野がぞの乞食。目と醒りて欠伸。頭と搔つて此方の  
將棋とそとのぞきあわあをや。油断一ト北朝方も都づく  
かられもんぬ。もくと塵兵湯へこれとまくすり。そちうグロカ  
ソシギ。助言よましく居とねりつれを。乞食へ口とつゞて天窓。  
薄とさう。又卧ぬ將棋へ勝負まとつゞ。うやうやしくうなが  
幣又グサと負色こそ。をとく揆べく見えれど。幣又へ負を立  
約とくたよせり。搦て大地へぐるまと投付す。塵兵湯も目尻引  
あげ目がとてよぶふ面とあらぐら。よくくありば身みも輕若  
やくあた詞のわざと心づき。こあが笑へをよこも笑ひよびふ呵くと  
笑ひ。さて幣又へ投ちじし。約と集く懐ふとくせし折一也。

極樂寺の切通しの方より。ざまに羽織と野袴した。肩と打す。臂  
あてとりていろが拂き旅さへ。落葉と踏分つて小来り。旅次の  
宿まで此駕籠とやとび。とく家とおれを。塵兵湯へこあえ  
りとひ。相棒の泥太ひいでへ行いやとわざと見えまへ。とそ  
ひの十一人塚の下よりの沙深き所ふ例つて居さへれどそ  
うでくとて行てよび起せど。熟睡と目とまくとぞ。旅さへ  
氣とよし。我急の内中とひ。ひれ日みどりのとひれを。とー乃  
間も猶豫うゞ。相棒が間ふ合ひ。先へゆゑく別の駕籠と雇ふ  
べくとひとぞ。やんとまくとぞ。幣又しきて。まげちとくとひれとぞ。これ  
塵兵湯。あの泥太りとく。醉とれ様子れど。呼起一と所が急か  
役ふへ立べうぞ。今のかうそのの中からうに。うちガ片棒手とて行

べれをもやく此御方とままでせよとて。塵兵湯を森がて。さうく  
くらべ都合う。つゞきまこと駕籠とくろてかしゆれ。さうくのん  
賃歩と論じてまくまく。今へ何時ふやと問ふ。塵兵湯日ざ  
とあふを見く。いま未の下まふもひりんくとす。幣又もとま  
ふ。此松の影異ふとすれど見るれどいふも其くふひりんく。  
かのさうく打うかづま。日下のころの旅されを心いそぞり。  
隨分いそげとくわつ駕籠ふ業うる。前棒へ塵兵湯わと棒も  
幣又が。鳥帽子白張宮奴の形もそくぬ片相手。我肩へと下け  
うくも神輿とく扇れど。駕籠とぶくも讀と歌酒代の  
錢とおりをこそとつぶせたつ。ぐきわげる旅駕籠の音ふ吹込  
沙烟。ヤツサコリヤサ「りゆうさやまうさとかけ声も。足もそくぬ富士

三里。七里が濱の波打ぎと。千鳥掛けふぞくと行ぬ  
○宝趺塵蝕無堂宇。腸瘦絶容數百人。と萬里居士乃  
て祐。鎌倉深沢の大佛のそりふ。人あまと群玉物を  
そそ立す。釣りぬ翁牛ちよ童。殘菜つむ姫。見しる蟹乃  
とくひすゞ。旅人まじゆか合ふ。我さんとおトわりぬ。こゝ  
何とアヌクレ。白髮といでく旅の老女。砾足み尻。けりえ  
あづろの笈と菅笠とくろふあた。竹杖みそびらまくやまと  
居る旅の老女。やうて諸人ふりふ。妻。身の因果物語と懺悔のくろふ語。まくはせまくとべ。妾。丹波  
の國の山奥よ住。獵師の妻。まく娘とふく憎みて。平日  
身上と撮れきて。まく娘。まく娘。谷川

身を捨てしなづくきりぬ。其報いゆてすよ娘と撮る大指の  
さへ。もうまうふ痒くかうてしまえがくうーぐ。つらふ蛇とあらそ  
ひとのま、うりうぬ身とくうぬ。それとまくともひく。右の手先  
みあらふるゆの取のけてさー出をゑれど。大指のまに目口鮮  
き。蛇ふく心のうみやうびやうふく。アラシムカの毛ち  
ざりぬ。老女又つはく。これにてく。妾先非と悔。もらまら日來  
の悪念とひきぐく。菩提心を起。諸國の靈場めとがみ  
ゆくを。罪障と滅きゆきとゆき。指もゆき如くよきりや  
せりと。うるわしかむく。懺悔や罪と滅き。よきけふれ  
ぐ。えぐく此更と語りく。罔せまきをう。此縁倉みに蛇が谷と  
り所もある。昔語りとてまーとをもう。そまくを妾と

事あり。妬妬の心よりとうけまゐる。されど大指の蛇もあし  
因景へあり。とてうれむ。當地の靈場と并むつひくふ。其の舊跡跡  
とも見えぬやうと多くいとまぶげあり。立ち  
集ひける人へこれと聞く。あかむそろし。物のむかひへりぞ  
あす。かる奇粧もまのあらう。見えしべ。實じんゆとをうなぞ。世  
の人のみ戒をといふもあり。あかめぐり。前代未聞。又とぞひき  
詠柄ぞ。あれとぞ物みせとしん福と得べま。錢もとて刃をとれ惜き  
ゆふもゆふもあ。憐れの心ある者へ一錢二錢とあらまき去。心うちに輩も。  
眺歌えふりてゆもあり。おのぶゑび。散行ぬ。彼老女もやそ身と起  
腰とつゝと復と背む。笠とよがま竹杖とつゝ稻村ヶ崎の方へ去ぬ。

雙蝶記卷之一終

